ナシの袋掛け栽培とキナコネアブラムシ

はじめに　キナコネアブラムシ *Aphanostigma iakusuiensis*(Kishida) は、中国、朝鮮半島及び日本に分布し、ナシ類を寄主とするアブラムシとして知られている。わが国における本種のナシの被害は、大正年間から昭和初期にかけて奈良県の一部で認められ、特に、袋掛け栽培のナシに被害が甚大であったとされている。その後、わが国では目立った被害の報告は見当たらないが、近年、中国大陸において、袋掛け栽培されたナシの被害が報じられている。そこで今回、わが国のナシ栽培地帯においても注意を要する害虫として、その生態及び簡単な見分け方を紹介する。

生態　年間８～10世代経過する。前年の晩秋、芽の基部、樹皮の間隙などで越冬した卵が、ナシの萠芽期から開花期にかけてふ化する。幼虫は汁液を吸収して成長し幹母となる。幹母は約１カ月にわたり、１日平均１～４個の卵をほとんど毎日産み続ける。

幹母の卵から育った成虫は、普通型と呼ばれ、以降普通型が無性的に卵を産出し、９月上旬まで世代を繰り返す。この時期、ナシに寄生する他のアブラムシでは、幼虫を産んで繁殖するのに対し、キナコネアブラムシは、常に卵で繁殖するのが特徴である。

秋になると産性型が出現し、雄になる卵と越冬卵を産む雌になる卵(これら雌雄を有性型と呼ぶ)を産出する。そして、晩秋に、雄と越冬卵を産む雌が交尾して越冬卵を産下する。

被害　本種は、樹皮の間隙など狭く凹んだ場所に好んで寄生する習性があること、また、袋掛けにより外界から保護されるため繁殖に好都合となることなどが、袋掛け栽培ナシに被害をもたらす原因となる。即ち、袋の結び目、果面と袋の接する所、果梗部のくぼみ等が恰好の寄生部位となる。被害を受けた果実は黒変し、亀裂を生じたり二次的に病原菌が寄生したりする。

なお、本種の和名の由来は、寄主に群がった様子が黄粉のように見えるところからきている。

見分け方　ナシに寄生するアブラムシは、ナシアブラムシ、ワタアブラムシなどが知られているが、本種は体色が黄金色、体型が逆洋梨型をしており、触角が非常に短いこと、角状管を欠くことなどから、他種との識別は可能である。

おわりに本種がそれほど国内にまん延しなかった理由として、飛行能力に欠け、寄主範囲がナシ類に限られることなどがあげられる。しかしながら、国内に局地的に発生し、しかも被害程度がそれ程問題とならない病害虫であっても、何らかの要因でまん延または大発生の可能性があり、今後とも注意が必要である。

〔図は田邊・三島（1930）梨「キナコムシ」二関スル研究成績、奈良県農試より〕

産性型成虫（背面）

産性型成虫（腹面）

幹母の寄生状況

農林水産省